

I. <論考>

1. アイルランドにおけるポストコロニアリズムとスポーツ

坂 なつこ

はじめに

P. ゴフ (Poul Gough) は、インターネット上で、「アイルランドは、植民地ではなかった」と言い切った(「Why Ireland Wasn't a Colony」)¹⁾。第一に、アイルランドは、スコットランドと同様に英帝国の一部であり、ジェームズ一世(スコットランド王、ジェームス六世)はアイルランドの王でもあったから。これに対して、T. ハロンラン (Thomas Hallonran) は、同様にインターネットにおいて、ゴフの「イングランドと英帝国の混同」についての注意にはかろうじて同意を示しているが、彼の意見は「ポストコロニアル研究を直線的時系列の証明へと押し戻す希望」であると応答している(「An Éirinneach nó Sassanach tú?」 -- Are You Irish or English?)²⁾。ゴフのような主張は極端であるとしても、英帝国とアイルランドの関係をとらえることは簡単ではない。ポストコロニアル研究でアイルランドに言及されることは、文学を除けば、それほど多くはないといえる。地理的にはヨーロッパに位置し、文化的にも英帝国とは緊密な関係にある。さらに、「たまたま白人であった先住民」が、それをいっそう困難にしているといえる³⁾。

他方では、それゆえ、植民地としての特殊性を強調する立場もある。E.W.サイードは、最初にW.B.イェイツとF.ファノンをポストコロニアル研究において論じたと考えられているが、1995年にダブリンで行われたインタビューに答えて次のように述べている⁴⁾。

「アイルランドは、ヨーロッパの国でありながら、ヨーロッパとはちがう、とくに大陸ヨーロッパとはちがっており、アイルランドのようなさまざまなヨーロッパ諸国を一般的なヨーロッパ的パ

ーソナリティのなかに沈めてしまうのではなく、さまざまな差異を際立たせることこそ、まさに植民地世界の他の部分を論じる際に非常に重要になるだろうという気がするのです」⁵⁾。

本稿では、このようにさまざまにとらえられるアイルランドが、コロニアル、ポストコロニアルとして、どのような意味をもつかについて検討する。ポストコロニアル(植民地時代以降)という語が意味することが、過去・現在・未来の「三つの時期を切りはなすことなく、たがいに折り重なったものとして、すなわち、ある時代が別の時代を包み込んでいるものとして考えること」とするなら、英帝国にもっとも近く、もっとも古い歴史を持つ植民地であり、今なお北アイルランド問題を抱えるアイルランドについて、ポストコロニアル研究の視点を検討することは有益であると考えからである⁶⁾。L. ギボンズは、アイルランドの植民地としての過去を引き合いに出すことで、「普遍性が主張され、差別と抑圧の歴史の共有を通じて、国境を越えた他文化への共感を築き上げようという試み」を評価し、こうした「場所のポリティクス」が、「時間的、場所的に特定の場合から語ることによって、普遍性は弱まるどころかいっそう向上する」と述べる⁷⁾。それは、アンチグローバルとしての安易なローカルの強調や、文明論からの啓蒙主義を避け、排他的でないナショナル・アイデンティティのあり方を検討するための理論的枠組みを模索する試みである。そして、コロニアルの時代に生まれ、ポストコロニアルにおいて発展したスポーツ団体ゲーリック・アスレティック・アソシエーション(GAA)を例に、植民地とともに世界に広がったスポーツが、そのコロニアル性をどのように克服し、また、生き延びて

いくのか、人々の生活にどのように位置づけられるのか、考える足がかりとなると思われる。

2. 「ポストコロニアル」

ポストコロニアルという語は、多くの研究者が語るように、しばしば曖昧な用語である。字義通りの意味での「ポスト」とは、時間的な経過を示しているが、それは単に「植民地以降」ということではない。A. ベアナー (Alan Bairner) は、「ポストコロニアル」という用語が構築的で、しばしば、全く異なるものである、「素材と方法」を含みこむと述べる⁸⁾。だが、そこにおいて「ポストコロニアル」という概念は、弾力性を持ち続けてきたというのである。

ホミ・K. バーバは、「ポストのついたこうした用語が（ポストフェミニズムやポストモダニズム）、『越えた』ものへの指向性を帯び、止まることを知らない改革のエネルギーを体現しているとすれば、それはそうした用語が、われわれの経験を拡張し、脱中心化することによって力を得ていく場へと現在を変革する限りにおいてである」と述べる⁹⁾。脱中心的な認識の変革により、客観化するだけではなく、そこに多様な経験の解釈が可能となるのである。バーバはまた、ポストコロニアルな認識は、「新世界秩序」と国際的分業に代表される、「新植民地主義」的な関係の存続を思い出すために有益であるとする。そこでは、「ポストコロニアルな視点によって、さまざまな収奪の歴史を認知し、抵抗の戦略を生み出すことが可能」となるからである¹⁰⁾。だが、それだけではなく、「脱植民地的な反近代をしめすさまざまな文化は、近代によって生み出され、しかも近代から切断され、それとしのぎを削るものであって、近代の抑圧的で画一的なテクノロジーに抵抗するものとはいえないだろう。しかし、同時にそうした文化は、その境界線上の位置から、異種のものが交雑する可能性をはらみながら、植民地宗主国の抱く近代の共同幻想を『翻訳』し、さらには書き換えていく」のである¹¹⁾。

R.J.C.ヤングは、「ポストコロニアルな文化の

分析がこだわってきたのは、理論的視野を鍛えることでこれまで支配的だった西洋的な物の見方を問題にすることだ」と述べている¹²⁾。より政治的、経済的には、「西洋に属さない三大陸（アフリカ、アジア、ラテンアメリカ）がヨーロッパと北アメリカに対してほぼ従属的な位置にあり、そこに経済的不均衡が存在するという認識」をもち、そのような「不平等と闘う活動に役立つ政治と哲学」であるとする¹³⁾。それは、「西洋」が「非西洋」を植民地化した領域において有効となる。では、「西洋」の一部であるアイルランドはどのようにとらえることができるだろうか。

3. コロニアル、ポストコロニアルとアイルランド

アイルランド研究において、ポストコロニアル研究は、M.クローニン (Mike Cronin)によれば90年代になるまでほとんどみられなかった。1990年代というのは、アイルランドが空前の経済発展を経験する時代である。劇的な社会の変化を経て、はじめて、「植民地」ではない、脱植民地化したアイルランドについて、語ることができるようになったということもできるだろう。

しかしながら、その解釈と読みの試みは、さまざまな困難を伴うものでもあり、歴史的背景からも、さまざまな立場があらわれることとなった。

J. クレアリー (Joe Cleary) は、アイルランド人文科学における過去 10 数年において、現代文学や文化研究にコロニアルおよびポストコロニアル理論のアプローチの方法を取り入れることが、より重要で発展的であることを示しつつも、それがつとに議論的となるものであることを指摘している¹⁴⁾。多くのものにとっては、肯定的で歓迎すべき発展として捉えられた。現代アイルランド文学や社会の進化について考える新しい方法の進展のために、アイルランドの批評を利用し、より広い一連の国際的な理論や批評に貢献することを可能としてきたのである。だが、他方の人びとにとっては、そのようなコロニアルやポストコロニアル研究の出現は、後退を意味していたとする。「文学や審美的議論の粗雑で正当でない『政

治化』として文化的保守主義による激しい批判がなされ、ポストコロニアル研究は、修正主義者や左翼批評家からも新しいアカデミックなジャーゴンにおける疲弊したアイルランド文化ナショナリズムの偽物の革新として拒否され続けている」のである¹⁵⁾。「北アイルランド」という「植民地」を抱えるアイルランドにとって、ポストコロニアル研究は何らかの政治性を帯びざるを得ない。それでは、アイルランドにおけるポストコロニアル研究の解釈的な説得力は、どのようなものか。C. キャロル (Clare Carroll) は、ここで、「近代主義の陽気な物語も、ナショナリストの伝統の浅はかな物語もどちらも批判されるべきだ」とする¹⁶⁾。現在も「北」という植民地的過去への努力を必要とするアイルランドにとって、ポストコロニアル研究は歴史の合理化を拒否させるとする。例えば、そのような努力は、ナショナルな神話的歴史を、「科学的な歴史研究」へと導こうとした修正主義者たちの論争についても指摘しうる¹⁷⁾。キャロルは、インドの政治学者 A. ナンディ (Ashis Nandy) を引用し、「今世紀が示したものは、組織化された圧政の下で、真の反意語は常に、排除された部分 vs. 包含された全体であった、・・・すなわち、過去 vs. 現在ではなく、過去が現在であり、現在が過去であるような非歴史性であり、圧制者 vs. 非抑圧者ではなく、そのどちらも、つまり共同の犠牲者へと変える合理性である」¹⁸⁾。このことは、歴史と無関係の非時間性を裏付けるものではない。むしろ、現在に浸透する過去の含意を歴史的に理解することであるとする。既述したように、「過去・現在・未来」が含み込まれるようなあり方に目を向けることである。それは、他の非ヨーロッパ地域の植民地と比して、コロニアルとポストコロニアルの区別がいっそう困難なアイルランドの歴史の「罨」に陥らないことである。あたかも、ゴフのように、アイルランドが決して植民地ではなかったかのような、あるいは800年にもわたって常に植民地としての「圧政」を被ってきたかのような、単純な選択ではないのである。

アイルランドは、地理的にも文化的にもヨーロッパの一部であるために、サイドにみられるように、アフリカ、カリビアン、ラテンアメリカ、そしてアジアにおいて発展してきたポストコロニアル理論にとってなにか越境した場所と見なされている。しかし、アイルランドは最初のイングランドの植民地であり、北アメリカへの入植者の訓練場であり、なぜそしてどうやって征服し入植するか、という最初のディスコースの場でもあった。このディスコースは、ヨーロッパ人でありカソリックであったアイルランド人が、生まれは非ヨーロッパ人であり習慣においては異教徒として表象されるということであった。宗教的には、アイルとヨーロッパのどちらもとも同盟したカソリシズムは、またプロテスタントのイングランドにアイルランドを対抗させたのであった。

アイルランド人であることは、人種的な「他者」としての表象への従属でもあった。イングランドの社会的、経済的、政治的構造へと強力に従属させられたアイルランド人による抵抗によって、アイルランド人は「うまれながらの」奴隷として支配者によって性格づけされたことが、彼らを生得的に「好戦的でノマディック（放浪の民）」であるという他者像をつくりだした¹⁹⁾。そしてそのようなディスコースは、次に他の植民地の人々の描写へと適用されたとするのである。

「他者」としてのアイルランド人のこの表象をいっそう複雑にするのは、1801年の連合法による英国への完全な政治的合併である。それによって、アイルランドは、植民地でありながら、英帝国の一地域となるからである。それにより、プロテスタント・アセンダンシー（プロテスタントの支配勢力）、アイルランド系スコットランド人、カソリックのアイルランド人など、地球規模の植民地化の過程に登場する。例えば、R. ケースメント (Sir Roger Casement, 1864-1916) は、英国の外交官でナイトの称号も与えられたが、1912年に植民地勤務を辞めて、翌年アイルランド義勇軍に加わった。その後、反逆罪とスパイ活動の罪で1916年にロンドンで絞首刑となった。また、英軍の一部

として 1857 年のインド大反乱を制圧したコナクト・レンジャーズ (Connaught Rangers) など、アイルランド人が積極的に英帝国発展に尽くした例とされる。英国帝国へのいっそうの統合の過程をここにみることができるだろう。

ベアナーは、アイルランドの英国との関係とナショナル・アイデンティティのポリティクスに関する困難性について、三つの主要な要素があることを示している²⁰⁾。第一に、二つの国の物理的近接性、とりわけ、それぞれの支配的エリート間の歴史的な結びつきが強いことである。また第二に、進行形の存在である北アイルランドである。「北」のプロテスタントやユニオニストは自分たちを英国人と見なしている。ベアナーは、アイルランド社会に存在する「Britishness」や「Englishness」を、「Irishness」から区別することが、他の植民諸国と比してもいっそう困難であると述べる。英国とアイルランドの近接性は、ポストコロニアル社会としてアイルランドを明確に語ることに制限を設けるのである。だが、他方、第三に、英帝国のプロジェクトが遂行される前に、アイルランドが、それ自身特異なスポーツ文化を持っていたことが指摘される²¹⁾。このスポーツ文化が、文化戦争を行う際の豊かな領域をアイルランド人にもたらしたとするのである。

4. ポストコロニアル研究とスポーツ

では、ポストコロニアルにおいてスポーツはどのように扱われてきたのか。J. ベイル/M. クローニン (John Bale/ Mike Cronin) は、「文学、映画、音楽、ジェンダー、科学などを網羅しているが、身体的実践であるスポーツについては、見落とされている」とする²²⁾。人類の活動のなかでももっとも世界的に普及され、共有されている文化の一つであるスポーツが欠落しているというのは、ポストコロニアル研究においては大きな欠陥であるとする。スポーツおよび身体的実践は、パフォーマンスを通した「現実」をつくりだす集団的な出来事であり、そのため、ポストコロニアル研究の中心的な領域である文学以上に、潜在的

にポストコロニアル研究をより実りの多いものとする可能性を指摘する。ベイル/クローニンは、ポストコロニアルのアプローチや理論がスポーツ研究に限定されたインパクトしか与えなかったとするが、他方でスポーツとポストコロニアル理論は、きわめて重要なテーマを共有しているとする。すなわち、「身体」である。身体はスポーツ研究の中心であり、ポストコロニアルのディスコースや分析においても決して周辺的なものではなかった。C. ナッシュは「身体は、社会的に書き込まれた属性が権力の利用の一部として機能するテキストとして読まれる」と指摘する²³⁾。

ベイル/クローニンは、植民地のディスコースにおいて、いかに「原始的な身体」が彼/彼女を表象する主要な符号であったかを指摘している。

「『身体』こそが、発話、法律、歴史以上に、未開の人びとを本質的に定義づける特徴である」と述べられる。「アフリカ人」の身体は「視覚的に」異なるものとされ、「自明な人種の差異」が、西洋の主体の完成を確認するとするのである。そして、そのような個々人の表象から、それらを階級や集団の身体へとあてはめ、ステレオタイプが形成されるのは、容易なステップであり、このことは特にスポーツにあてはまるのである。「(辺境の) 旅行記作家とスポーツ科学者といった対照的なグループは、各自の読者にとってのアフリカ人の身体的重要性へと確実に気づいていたのである。『ナショナル・ジオグラフィック』は、進んで多数のアメリカ成人男性へ、裸の胸のアフリカ女性の提供者となってきたようである。もちろん、全く教育的理由によってであるが」²⁴⁾。他方、アフリカ男性の身体は、スポーツ生理学者や人類学者は、「現在、世界中の白人競技者が取り憑かれている、科学的に推測されるアフリカ人競技者の並でない生理学についてのアイディア」を期待しているとホバマンは指摘するのである²⁵⁾。

J. ホバマンは、さらに、次のように指摘する。「黒人ボクサーのジミー・ダブリンは、かつてこういった。『俺たちは、読み書きはだめだ。だが体力ならまかせてくれ。』隠れ人種主義者として

の自己像は、こうして進んで受け入れられることになる。それは、フランツ・ファノンが植民地的心理についての有名な研究『黒い皮膚、白い仮面』で記述している、神秘的黒人身体性への致命的な呪縛の一例である」²⁶⁾。他者が作り上げた姿が「自己像」となっていく。

スポーツは、それ自体が植民地化の一部でもあった。そして多くの場合、独立後もそのまま残っていく。新植民地関係と呼べるものを含み、ここでも、コロニアルとポストコロニアルの時代区分は決して明確ではない。だが、ベイル／クローニン、ポストコロニアリズムとは「まだ成し遂げられていない何か」であり、「未来のためのシナリオ」であると考え、例えば、スポーツにおける国際組織は、現在でも、しばしば植民地化のミッションを目的としていると捉えることができる²⁷⁾。世界でもっとも大きなスポーツ組織の一つである国際陸上連盟の例を挙げ、200 カ国以上ある各加盟国に対して、アスリートが育成されるべき環境を整えるための「アスリート文化」を推進するという目的がそれであると指摘する²⁸⁾。全ての加盟国において、アスリート文化がその国の隅々まで、可能な限り強く広がっていくことを期待して促す。N.エリアスが「スポーツ化」として捉えたのは、単なるルールや競技が普及される過程ではなく、フェアプレイの精神や暴力への嫌悪など、振る舞いや情動をある特定の型に変化させる、このような「文明化の過程」なのである²⁹⁾。

スポーツは、宗主国にとっては、社会的コントロールであると捉えられる。既述したように、国際スポーツ組織は「植民地主義の遺産」であるが、ルールの共有、管理組織や国際連盟という形態への共通の要求があるために、スポーツがポストコロニアル状況を表象するように変容されうる様式は、非常に限定される。ベイル／クローニンは、国際的ルールのもとで行われる場合やグローバルスポーツビジネスのコンテクストのもとでは、インフォーマルな帝国主義を暗示させる象徴的な権力構造が残っていると看做しているとする。

他方、近年、ポストコロニアルスポーツは、植民地あるいはポスト／ネオコロニアルの抵抗様式としてみられるとする。ベイル／クローニンは、H.ギルバート／J. トンプキンス (Helen Gilbert/ Joanne Tompkins) によりカテゴライズされたパフォーマンスの概念に依拠して、ポストコロニアルスポーツもそこに含まれるとする。第一に、劇的なボディランゲージ、第二に、スポーツの時空間のアレンジメント、第三に、スポーツ慣習の操作である³⁰⁾。ベイル／クローニンは、スポーツのアリーナは、それ自体に焦点をあてるよりも抵抗の「コンテナ」(容器)として考えられうるとする。すなわち、抵抗や政治的行動はより速く「境界を越え」て生じる。固定化され、西洋中心に形成されてきた主体と客体の双方を揺るがすと考えられる。スポーツは、規定のルールに則った身体を集会的イベントとして現前させる。だが、そこにおけるパフォーマンスは個々の個性やそれぞれの社会における解釈を含み、再解釈され、再提示される。そこには「ずれ」が生じるともいえる。そのため、「場違い」であること、例えば最初のケニア人の長距離走(「黒人」は短距離という考えへの反駁)や、西インドのクリケットチームの勝利(クリケットは「白人」のゲームという考えの転覆)などが、固定的な関係を常に揺るがしていくといえる。

5. GAA とポストコロニアル・アイルランド

では、GAA は、アイルランドのポストコロニアル研究にどのように位置づけることができるだろうか。

クローニンは、「32 カウンティ」(統一アイルランド)を主張し続ける GAA は、未だ植民地的思考に拘泥されていると批判する³¹⁾。

2007 年 8 月に新聞に取り上げられた小さな「事件」に、その一端が垣間見られる。北アイルランドに位置するカウンティ・フェアマナー (Fermanagh) のプロテスタント選手が彼への差別的発言を発端に引退表明をだしたと報じられたのだ。カウンティ代表選手としても活躍したダレ

ン・グレーム (Darren Graham, 25 才) は、プロテスタントである自身にむけられた相手選手や観客からのセクト的な嫌がらせを受けて、GAA クラブからの引退を表明したのであった³²⁾。

この「事件」は、すぐに GAA のフェアマナー支部と GAA 本部から謝罪の声明がでたことで、まもなく収束した。GAA フェアマナー支部は、声明で、正式の謝罪を表明し、これらの嫌がらせを改善するための新しい手続きを取り入れることを宣言した (フェアマナー支部のプレジデント自身もプロテスタントである)。ダレン自身もクラブへの復帰を明言した。

インターナショナルヘラルドトリビューンの見出しには「北アイルランド平和プロセスにもかかわらず、宗教的分断は存続」との見出しが載せられた。もとより、北アイルランドが抱える問題の全てがセクト的対立に還元できるわけではないが、政治レベルのみでは解消されえない、人々の対立の根深さを物語っているといえる³³⁾。

ダレンの生い立ちはまた、いっそう事件を象徴的にしている。母親がカソリックであるが、アルスター防衛隊 (Ulster Defence Regiment) の軍人であった父は、彼の生後すぐに、勤務時間外に IRA に殺された。また、彼の叔父、すなわち父の兄弟二人も IRA によって殺された。ダレンの父方の祖父が B-Specials (アルスター防衛隊の前身) のメンバーであったこと、また父だけではなく叔母や叔父がアルスター防衛隊で職を得ていたことが、カソリックにとってダレンへの嫌がらせを正当化するに十分だった。他方で、ダレンの母親だけではなく、彼の 2 才になる娘もカソリックであり、アイリッシュタイムス紙のコラムニスト、F. オトゥール (Fintan O'Toole) は、ダレンが、「ベルファスト合意 (1998 年) に温存されている『二つの伝統』という考え方が、現実のありのままの歪みである根拠の具体化である」と指摘する³⁴⁾。

クローニンが、GAA がいまだに植民地の状況に拘泥していると批判していた「ルール 21」は廃止された³⁵⁾。2001 年まで GAA では、北アイルランド警備隊 (王立アルスター警備隊) に所属してい

る者の参加をそれにより禁止していた。これらがプロテスタント住民を直接的に排除する禁止令ではなかったとしても、1884 年に設立され、カソリシズムとの結びつきや独立運動におけるナショナリズムの一翼を担ってきた GAA に、北アイルのプロテスタント住民がクラブに参加することはほとんどなかったといえるだろう³⁶⁾。GAA は、常に統一アイルランドを意味する 32 カウンティのアイルランドを活動の場としてきた。そのことが、北においては、常に GAA とナショナリスト、カソリシズムとの結びつきを表象してきた一因であるといえる。GAA がスポーツ団体として、その排他性を徐々に緩和してきているのは、上述したいくつかの状況などが物語っている。しかしながら、GAA が常にナショナリズムやカソリシズムの表象であり続けてきたことは、それほど劇的に変化することは難しいといえる。

他方で、この出来事は、GAA のプレジデントの N.ブレナン (Nickey Brennan) が、アイルランド教会 (The Church of Ireland, プロテスタント系) の機関誌のインタビューに答えて、プロテスタントの選手の GAA への参加を歓迎するという声明がだされた後に起こった³⁷⁾。このインタビューは、同年同月、GAA 専用スタジアムのクロークパークがラグビー、サッカーの「英国スポーツ」への一時的開放がなされたことにつづいて行われている。ラグビーの 6 ネイションズの対イングランド戦では緊迫した空気のなか、イギリスのアンセムが唱われたが、それに対するアイルランド側の寛容な態度は、「ケルティックタイガー」の後にアイルランド社会が獲得した社会生活の安定化の表れであるともいえる (アイルランドにおいてもラグビーがミドルクラスを中心に人気のあるスポーツであることも影響しているであろう)。

C. キャロル (Clare Carroll) が指摘するように、アイルランドが、いまだ分断された国家としてあるだけではなく、植民地でありかつポスト植民地という状況を反映しているといえる³⁸⁾。

だが、コロニアルとポストコロニアルの状況は、けっして固定化されているわけではなく、「・・

・新しく作り出された空間を、自分の空間と関係づけて解釈するよう促すのである。それは既に確立した意味を届けようとはしない。むしろそれは、対話的な出会いのなかから、新たな意味を創造し、互いのなかに映し出そうとする」³⁹⁾。スポーツの場は、その意味で古い意味と新しい意味がぶつかり合い、身体を介して、常に新しい意味が作り出されるアリーナである⁴⁰⁾。GAA は、そのため、二重の意味でアリーナであるといえる。オトゥールは、「北アイルランドにおいて、プロテスタント住民は、長い間このような制度的なセクト主義がはびこっていたと主張しているが、犠牲者としてではない、カソリシズムのセクト主義の性質については、全く正しく理解されたことはなかった」と述べる⁴¹⁾。そのため、ダレンの事件が生じさせたのは、「統一アイルランド」あるいは「カソリックアイルランド」という GAA の表象を「ずらす」ことであり、「新しいアイルランド」と「古いアイルランド」との緊密で複雑な連関であったとはいえないだろうか。

まとめにかえて：「場所」から語るということ

GAA がアイルランドにおいてどのような存在であるかは、T.ハンフリーズ (Tom Humphries) が、GAA を「スポーツ団体以上のものだ」と述べる時に理解される。「それはナショナルトラストだ。GAA は、私たちが共有して所有していると感じられるものなのだ。そして、その共有された情熱は、自分たちで管理すべきものなのだ」⁴²⁾。ハンフリーズが言及するのは、単に人気があるという意味ではないだろう。「オーナーシップ」とは何か、誰がそれをもちうるのか。物理的な意味だけではなく、精神的な意味においても、近年のプレミアリーグなどのビジネス化によるクラブの私有化とは異なる次元を有する。それはだが、排他的に「伝統」として保存されていくのではなく、また、一方的にグローバルスポーツとして普遍化されていくのでもなく、常に「古いアイルランド」と「新しいアイルランド」が表象され葛藤する場として存在する。

ポストコロニアルとしてのアイルランドが持つ特殊性は、このような点に見いだされるのではないだろうか。ギボンズは次のように述べる。「ある文化のなかで（強調は原文）感じられる共感と連帯とを他の文化に拡張することによってのみ、そしてまさに差異を基盤にすることによってのみ、〈啓蒙〉は、しばしば市民性やコスモポリタニズムの顔をしてやってくる自民族中心主義と文化的排外主義を克服する希望をもてるのである」と述べる⁴³⁾。現在もコロニアルとポストコロニアルの状況の葛藤のなかにあり、さらなる社会変化の中にあるアイルランドは、その壮大な実験場であるということができるかもしれない。

注

1) <http://www.usp.nus.edu.sg/victorian/history/ireland2.htm>. Last modified 20 May 2003.

2) <http://www.usp.nus.edu.sg/post/ireland/history/> Last modified: 26 May 2003.

3) Luke Gibbons, Transformations in Irish Culture, Cork University Press 1996.

4) 『民族主義・植民地主義と文学』 テリー・イーグルトン、フレドリック・ジェイムスン、エドワード・W・サイード[共著]、シェイマス・ディーン [序論]、増淵正史、安藤勝夫、大友義勝訳、法政大学出版局、1996年。原著は1990年出版。

5) 立川健二『ポストナショナリズムの精神』現代書館、2000年、28頁。

6) 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書、vi頁。

7) L. ギボンズ『国民の賓客 アイルランド、移民、ポストコロニアルの連帯』『トレイシーズ』2001年2号、69-70頁。

8) A. Bairner, Sport, Nationality and Postcolonialism in Ireland, in John Bale and Mike Cronin(eds), Sport and Postcolonialism, Berg, 2003, p.159.

9) ホミ・K. バーバ『文化の場所: ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局、2005年、8頁。

10) 新植民地主義については、西川長夫「『新』植民地主義論: グローバル化時代の植民地主義を問う」平凡社、2006年。

11) バーバ、11頁。

12) R. J. C. ヤング『ポストコロニアリズム』岩波書店、2005年、7頁。

13) ヤング、6頁。

14) Joe Cleary, Postcolonial Ireland, K. Kenny(ed), Ireland and the British Empire, Oxford University Press, 2004, p.251.

- 15) Cleary, p.251.
- 16) Clare Carroll, Introduction: The Nation and Postcolonial theory, in Ireland and Postcolonial Theory, C. Carroll and Patricia King (eds), Cork University Press, 2003, P.3.
- 17) 修正主義論争の帰結については、勝田俊輔は、「本来は多様な知的活動を全て単純化して、ナショナリスト対修正主義者の二陣営に分類使用することは、不毛かつ不幸な争いであった」と述べている。「『共同体の記憶』と『修正主義の歴史学』—新しいアイルランド史像の構築に向けて—」『史学雑誌』Vol.107, No.9, 1998 年を参照。勝田は、また、修正主義論争が、ナショナル・アイデンティティの模索をめぐってなされたとして、その意味で「ポスト植民地時代の産物」であるとしている。
- 18) Carroll, p.3.
- 19) Carroll, p.4.
- 20) Bairner, p.161.
- 21) ベアナーは、アイルランドとスコットランドの間の相似性はこの点で指摘されうるとする。
- 22) J. Bale and M. Cronin (eds), Sport and Postcolonialism, Berg, 2003, pp.1-2.
- 23) C. ナッシュ「再地図化および再命名—アイルランドにおけるアイデンティティとジェンダー、景観の新しい地図学」『空間・社会・地理思想』5 号、2000 年、102 頁。ナッシュは、E. Grosz を引用し「身体は、知—権力の場所であると同時に、『抵抗の場でもある。なぜなら身体は頑強であり、抵抗弾劾的な再書き込みの可能性を常に持っているからである。そして、別の方法で自己を刻印し、自己を表象することができるからである』」と述べている。
- 24) Bale/Cronin, p.2.
- 25) 「黒人神話」がアフリカ系アメリカ人の社会的地位を上昇させたのではなく、「知能」が劣るものの手段としての「身体能力」の利用を定着せしめた。ホバマンは、「白人」からだけではなく、「黒人」によっても信じられている「神話」を批判するのである。
- 26) J. ホバマン『アメリカのスポーツと人種』明石書店、2007 年、234 頁。
- 27) Bale/ Cronin, p.3.
- 28) Bale/ Cronin, p.3.
- 29) N. エリアス/ E. ダニング『スポーツと文明化』法政大学出版局、1995 年。
- 30) Bale/ Cronin, p.5. Helen Gilbert/ Joanne Tompkins, Post-colonial drama : theory, practice, politics, Routledge, 1996.
- 31) M. Cronin, Ignoring Postcolonialism: The Gaelic Athletic Association and the Language of Colony, 1999. Web のものを使用。
- 32) International Herald Tribune, 7th August, 2007. 彼は、プロテスト
- ントの学校に通いながら地域の GAA に参加していたが、彼自身が地元紙に、選手自身がプロテスタントであるという例はフェアマナー州では自分だけではないかと語っている、Fermanagh Herald, 1st August, 2007.
- 33) 北アイルランドにおけるユニオニストのアイデンティティについての研究は、尹慧瑛「北アイルランドのユニオニズムと『包囲の心理』」『エール』日本 20 巻、12 月号、2000 年、アイルランド協会学術研究部、40-57 頁を参照のこと。
- 34) International Herald Tribune, 7th August, 2007. アルスター防衛隊は、北アイルランドの治安維持のために 1969 年に王立アルスター警察隊(1922 年設立)の補佐を目的に英国政府により設立された準軍事組織。
- 35) M. Cronin, 1999.
- 36) 北アイルランドにおける GAA やその他のスポーツについては、J. サッジェン/A.バーナー「北アイルランドにおけるナショナルアイデンティティ、地域関係とスポーツ生活(その 1)」大沼義彦訳『北海道大学社会教育研究』第 18 号、1999 年。大沼義彦「アイルランドにおけるスポーツの背景—エスニシティとナショナル・アイデンティティの間」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第 89 号、2003 年。GAA とナショナリズムについては、拙稿「ナショナリズムとグローバリゼーション—アイルランドのスポーツを例に」『一橋大学スポーツ研究』Vol.25 (2006) pp. 11-18。
- 37) Church of Ireland Gazette, 23rd Feb. 2007.
- 38) Carroll, p.1. アイルランドのナショナリストの系譜は、決して一枚岩的ではない。アイルランドナショナリズムの多様性については、南野泰義「アイルランドにおけるナショナリスト諸政党の政治戦略—北アイルランド問題と『新アイルランド・フォーラム』をめぐって」『立命館国際研究』16 巻 2 号 2003 年を参照。
- 39) ヤング、108-9 頁。
- 40) R. グルノー『スポーツの近代史社会学』不昧堂出版、1998 年。
- 41) F. O'Toole, Making religion an issue, The Irish Times, 7th August, 2007. オトゥールは、1996 年の著作において、「英国の影響無しに、アイルランドを語ることは可能になった」と述べている。21 年を経たその言説と現実の乖離が、いっそう現実の難しさを照らし出しているといえる。M. Mays, Nation States, Lexington Books, p.177. 聖金曜日合意と北アイルランドのスポーツについては、A. Bairner, Inclusive Soccer - Exclusive Politics? Sports Policy in Northern Ireland and the Good Friday Agreement, Sociology of Sport Journal, 2004, 21.
- 42) Diarmaid Ferriter, The Transformation of Ireland 1900-2000, Profile Books, 2005, p.745.
- 43) ギボンズ、75 頁。